

海外生活 だより

シンガポール事務所

シンガポールで暮らしてみたら ～「ビール」で感じるシンガポール～

(一財)自治体国際化協会シンガポール事務所所長補佐
岡田 理花(熊本県派遣)

夏になれば「とりあえずビール！」と、連日ビールのCMがテレビから流れる日本と同じように、赤道直下(北緯1度)、高温多湿な熱帯雨林気候に属するシンガポールでもビールはとても人気があります。庶民が集うホーカーセンター(屋台街)では、地元HDB(公団住宅)に住む人々がビールを楽しむ光景を、昼夜を問わず見ることができます。ビールから垣間見えるシンガポールの状況や習慣、シンガポール人の気質についてレポートします。

東南アジアだから物価が安い？

物価の安い東南アジアの中心に位置するシンガポールですが、先日発表された「世界で最も生活費の高い都市」2014年度調査(注)で、第1位に選ばれました。酒税の高さもその要因のひとつとなっています。シンガポール政府は、酒税を「飲酒に伴う疾病などの社会コストを抑制する手段」として考えており、アルコール度数に応じて税額がかなり高くなります。

	アルコール 度数	1Lあたりの税額		
		日本 (円)	シンガポール	
			(円)※	(Sドル)
ビール	5%の場合	220	308	3.8
ワイン	12%の場合	80	859	10.6
日本酒(清酒)	15%の場合	120	1,069	13.2
焼酎・泡盛	25%の場合	250	1,782	22.0
ウイスキー・ ウォッカ	40%の場合	400	2,851	35.2

※1Sドル=81円換算

約1,300円～焼酎一本の「税額」です～

熊本の米焼酎「白岳しろ」(本体価格1,100円(税抜き))をシンガポールに輸入する場合、アルコー

ル度数25%、焼酎ボトル1本(720ml)ですから、 $22\text{Sドル} \times 0.72\text{L} \div 15.8\text{Sドル}$ (約1,280円)となり、本体価格よりも高い税金がかかることとなります。シンガポールで販売されている酒類は海外からの輸入品がほとんどです。実際には、税金に加え輸送コストや熱帯気候であるがゆえの品質管理コストがかかることを考えると、店頭価格はさらに高くなります。

国民的ビール、タイガービール

国際都市のシンガポールでは、日本人になじみが深いラガーから、黒ビール、アルコール度数が日本酒並みのものまで、さまざまな銘柄のビールがスーパーやコンビニなどで手に入ります。数あるビールのなかでも、シンガポールで一番親しまれているのはなんといっても地元ブランドの「タイガービール」です。東京23区ほどの狭い島ですがタイガービールの工場が存在します。年間1億3,000万Lを生産していて、このうち半分が輸出用、半分がシンガポール国内に出荷されています。



ホーカーセンター(屋台街)に集う住民

観光・金融などサービス産業のイメージが強いシンガポールですが、政府の外資誘致政策もあり、意外なことに製造業は産業別GDP構成比のうちもっとも大きな割合（約2割）を占めています。

タイガーガール

ホーカーセンターやレストランでは、ビールのパッケージを模した青いユニフォームを着た女性がビールを運んでくれます。パドガールのタイガービール版、タイガーガールといったところでしょうか。日本との違いは、多くのタイガーガールが中高年の方々ということです。丈の短いワンピース姿をものともせず、体力勝負でどんどんビールを運んでくれます。隣国マレーシアやタイにもタイガーガールがいますが、若い女性の場合がほとんどです。

飲食店のウェ이터や販売スタッフなどのサービス業は外国人労働者への依存度が高い職種です。高学歴化が進み、低賃金や単純労働などを敬遠するようになった若年層シンガポール人の採用は困難だといわれており、その影響がタイガーガールにも表れているのかもしれません。

お仕事は…

通勤時間帯にバスや地下鉄に乗っていると、どんな仕事をしているか一目で分かってしまう人たちがいます。なぜなら彼らは「制服」を着て通勤しているからです。タイガーガール、スーパーやファストフード店員などいろいろな職業の方が制服のまま通勤しています。従業員は通勤着の購入や着替える手間が省け、会社は更衣室やロッカーなどの設備が不要になり双方に都合が良いとのこと。とても合理的な考え方です。

ビールに氷、ですか？

日本ではなじみの薄い飲み方ですが、ビールに氷を入れる文化は東南アジア諸国（タイ、ベトナム）では広く親しまれている飲み方です。香りを楽しむためにそれほど冷やさないヨーロッパとは逆で、高温多湿な地域ではとにかく暑さをしのぐために冷たい方が好まれるようです。

シンガポールでは冷えたビールが一般的ですが、氷をいれて飲む場合もあります。タイ人コミュニティやチャイナタウンにあるレストランでは、好みを聞かれることもなく、当然のように氷入りビールが出てきます。



氷で飲むタイガービール

価格を重視する地元資本スーパー「Fair Price」では店舗によって冷えたビールを扱っていません。冷えたビールがある場合には、「冷やし代」一本当たり15セントが別途加算されます。7-Elevenなどコンビニエンスストアでも冷えたビールを買うことができますが少し高めの値段が設定されています。

お酒の免税制度

個人でお酒を持ち込む際には、お酒の種類によって3つの組み合わせで免税されます。

(単位:L)

	①	②	③
蒸留酒(ウイスキー、焼酎など)	1	—	—
ワイン(日本酒など)	1	2	1
ビール	1	1	2

なお、マレーシアから入国する場合やシンガポールを出国して48時間未満のときには、免税は適用されません。チャンギ空港では入国審査終了後、荷物受取所までの間に免税店があり、お得感からついつい立ち寄ってしまう仕掛けになっています。ちなみに日本の缶ビール容量は350mlが主流ですが、シンガポールでは323mlや330ml。なるほど、3本でちょうど1L未満になるサイズ。免税店への動線といい、缶のサイズといい、ここでも合理性を重んじるシンガポール人の気質がしっかり表れています。

(注) 英誌「エコノミスト」の調査部門エコノミスト・インテリジェンス・ユニット(EIU)